



Title	伊井春樹教授の御退官にあたって
Author(s)	後藤, 昭雄
Citation	語文. 2004, 80-81, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69019
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



伊井春樹教授近影

伊井春樹教授の御退官にあたって

後 藤 昭 雄

伊井春樹教授がこの三月、定年を以て大阪大学を退官される。国立大学教授として退官される最後のお一人ということになる。

伊井教授が大阪大学助教授となられたのは、一九八三年であるから（ただし一年間は国文学研究資料館助教授と併任）、大阪大学には二十一年間在職されたことになる。この間、多大の寄与をされた。

まずは、本誌の母体である大阪大学国語国文学会の育成についても、教授の力は大きなものがあったと思う。私も教授と同じ年に大阪大学に赴任したが、その頃は、なお学会としての本格的な活動はなくて、この『語文』の刊行も他に依存するような変則的なかたちであった。それを今のような学会としてあるべき姿にされたのは伊井教授であったと思う。このような言い方をするのは、当時私は教養部にいて、その場に立ち合っていないからであるが、この推測は間違っていないだろう。

伊井教授は、大学の教師として求められるものをすべて備えられていると思う。

研究者としては、常にトップランナーであり続けた。私は二年の後学であるが、私が大学院生であった頃の（伊井春樹）の学界への鮮やかな登場、その後の目覚ましい活躍ぶりは今も記憶に新たである。記憶を確認してみると、一九六五年、この年設立された中古文学会の第一回大会で研究発表をされている。また日本古典文学会賞の第一回（一九七五年）

の受賞者でもあった。その位置は現在も変わらない。そのようにして成された現在に至るまでの膨大な業績は、本誌に掲載されている業績目録が雄弁にもの語っている。

学生の教育にもきわめて熱心に取り組まれた。赴任後、いち早く大阪大学古代中世文学研究会を組織され、月に一度の研究発表会は現在も続いており、研究室全体にも刺激を与えている。あわせて研究誌『詞林』の刊行も指導され、学生は自分たちの手による雑誌作りを学び取り、号を重ねている。その指導のもとに多くの研究者が育っていったが、そのことも本誌と同じ頃に刊行予定の門下の諸氏による記念論集によって示されるはずである。

大学の運営についても、非凡な力を発揮された。とりわけ大学院重点化に際しては先頭に立って実現に尽力され、また最近の二十一世紀COEプログラム獲得にも中心となって貢献された。

そのCOEプログラムの実践としては、〈日本文学と翻訳〉をテーマとして、これまでに培ってこられた人脈を十全に活かして、多くの外国からのゲストを招いて、相次いで二度の国際学会を主宰された。

今、教授の目は、世界文学の中において日本文学を見る、これを位置づける、ということを見据えている。

研究、教育のみに止まらず、大学運営、情報化、国際化に対応する能力、企画力、行動力、先見性。伊井教授はそのいづれをも兼ね備えた人であった。退官されたのち、我々は失ったものの大きさを改めて思うことになるだろう。